

## 『子どもと自然環境』という卒研ゼミでできること

松 尾 公 則

What we can do in a graduation seminar called “Children and the Natural Environment”

Takanori MATSUO

### 1. はじめに

子どもと自然環境という卒業研究を担当して4年になる。この間、40名の学生を相手にしながら実践したことをまとめてみたいと思う。

長崎女子短大幼児教育科の学生を指導するようになって9年（非常勤として5年、常勤として4年）が過ぎたが、学生を相手にしながら常に思っていたことがある。それは、幼稚園や保育園のときにダンゴムシやバッタ、カエル、トンボなどの生き物を触ったり、捕まえたりして遊んだ経験を持っている人は多いのに、現在ではほとんどの学生ができなくなっているということだった。それどころか、悲鳴を上げて拒否する学生も数多くみられることに愕然とした。幼稚園教育要領解説（2008）にも、身近な環境とのかかわりに関する領域として、周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うとある。そのためには、園児と接する機会が最も多い保育者がその力を養うことが必要であると思う。事例で学ぶ保育内容領域環境（2017）には、「自然に親しみ、植物や生き物に触れる」や「遊びや生活の情報に興味をもち、地域に親しむ」、「子どもと環境のかかわりをとらえる視点」の中で自然とのふれあいの大切さが述べられている。このようなことを考えていくと、まず自分たち学生自身が自然に親しむ心を持つことが大切と考え、週1回のゼミの時間に自然との触れあいを数多く取り入れて体験させることとした。また、体験する、調べる、考える領域「環境」（2018）にある「身近な生き物の飼い方を調べて

みよう」にあるオタマジャクシの飼い方を参考にしてオタマジャクシの飼育を体験させてみた。さらに、多くの自然体験やオタマジャクシの飼育を通して学んだことを、カエルの授業という名のもとに特別支援学校の現場で実践し、さらに実習先の幼稚園でも試みることを希望した。以上のようなことから、この4年間のゼミにおける活動を報告したい。

### 2. 子どもと自然環境ゼミの目標

子どもと自然環境ゼミでは次のような3つの目標を立てて活動している。この3つの目標は4年間を通して変わっておらず、学生にも徹底している。

- (1) 将来、幼児教育の教育者となるゼミ生自身が生き物や自然に親しむこと
- (2) 何らかの動物を飼育（中心はカエル）することで動物とのかかわり方を学ぶこと
- (3) カエルの研究を通して学んだことを、特別支援学校や実習先で発表すること

### 3. 結 果

- (1) 「将来、幼児教育の教育者となるゼミ生自身が生き物や自然に親しむこと」について

ゼミの時間は週1回だけだが約3時間が確保されている。実施回数は前後期とも15回程度であるが、後期は、大学祭、卒研報告集、卒研発表会等の行事の準備に追われてしまうため活動はほとんどできない。よって、前期に(1)の自然に親しむ経験の大半を実施している。

## (1)ー① 英彦山登山 (図1)

学生の大半は登山経験がなく、興味も全くないと言っている。しかし、自然に親しむためには登山が一番良いと考え実施している。ありがたいことに大学のすぐそばに英彦山(標高385m)があり、比較的簡単に短時間で登山することができる。午後からのゼミの時間を使い、昼食をもって登山している。この山の、山頂からの眺望は抜群であり、長崎市内を一望できる。登山途中は消極的態度を示す学生も多いが、山頂からの景色を見たときに登山の喜びを表すようになる。春の登山中には、多くの昆虫や動物を見ることができ、その場での解説により自然に親しみ楽しむことを感じさせたいと考えている。この4年間で目撃できた動物は、爬虫類が最も多く、ニホントカゲ、ニホンカナヘビ、ニホンヤモリ、シマヘビ、ニホンマムシを説明することができた。哺乳類は、直接の観察は難しいが、糞などの痕跡により解説した。イノシシ、テン、イタチ属の一種、モグラ、キクガシラコウモリなどである。昆虫も多くみられるが、一般的なハチ、チョウ、オサムシなどという名称を使っている。その中でも、登山道の脇にあるアリジゴクの巣だけは詳しく説明している。



図1 英彦山山頂にて

## (1)ー② 自然のものを食べてみる

構内には自然が多く残されており、食べられる植物もたくさん見られる。ほとんどの学生が食べた経験がなく、食べることに疑問を呈する学生もいた。しかし、最初に食べて見せることによって全員にその味を経験させることができた。今年度に食べた9種の紹介をする。

## タケノコ

本学の周辺には竹林が多く、大学所有の土地ということで、たけのこ掘りから始め、自分たちで皮をむき、湯がいて食べる経験をさせた。ただ、湯がくには時間がかかるため、前もって湯がいていたタケノコを食べることにしている。その際、タケノコの生えているようすの観察も行っている。食べたことのない学生はいないが、掘るところからの経験は初めての学生が多い。

## グミ

本学の中庭にはグミの木が2本植えてあり、毎年実をつけるが誰も知らない。食べた経験のある生徒もいたが、ほとんどがお菓子のグミを思っており、名前さえ知らない学生がほとんどであった。味の感想は、酸っぱい、ザラザラする。おいしくない、渋みがある。が大半であったが、食感としてはまずまずの経験となったようだ。

## ビワ

長崎県の名産でもあり、食べたことのない学生はいなかった。ただ、構内の木から直接採って食べる経験は楽しそうであった。

## ツツジ

ツツジは食べるわけではなく蜜を吸うことになるが、多くの学生が幼稚園や小学校時代に経験していた。ツツジは校内や通学路、公園等に多く植栽されており、見かける機会が多いためと思われる。

## ヤマモモ (図2)

構内には一本のヤマモモの雌の木が植栽されている。毎年、多くの実をつけるが振り向く学生はいない。かえって落下した実を嫌がっているように感じられる。小さい実で甘みが少ないためか学



図2 ヤマモモの果実を試食中

生の評判はあまり良くなかった。

#### シイの実

構内にあるスダジイの木の下では秋になると多くの実が落ちてくる。生のままで食べた後、フライパンで炒って食べる経験をさせている。シイの実が火をとおすと格段においしくなった経験から、勤めたら食べさせてみたいという気持ちになってくるようだ。ただ、虫の入っている実もあるので、水に浮かべて沈むものだけが食べられることや他のドングリはあまりおいしくないことも伝えている。

#### マテバシイの実

構内には多くのマテバシイの木が自生している。初秋には多くが落下しドングリ遊びの材料になる。コマを作ったり、絵をかいたりしたことはあっても、食べた経験のある学生はいない。本格的な料理ではないが、フライパンで熱を通すだけで香ばしい味になるが、シイノミよりは評判は悪かった。アケビとムベ (図3)

構内にはムベはあるがアケビはない。ムベを採取後、別の場所から取ってきたアケビとの食べ比べをしている。両方とも種をなめるだけではあるが、砂糖の甘さに慣れている学生にとっては、生臭い (柿の匂いという表現もあった) においもあることからおいしいという言葉は出てこなかった。口に含んだ種を飛ばしあう遊びの方に夢中になっていた。



図3 アケビ試食中

構内に普通にある植物の花や果実や種子を食べるということは将来的には貴重な経験になると思う。昔の子どもたちなら誰でも知っていることだが、現在ではほとんど伝えられておらず、また、市内では見つけることも難しい。しかし、興味を

持って探せば結構見つかるものである。

#### (1)一③ カエル救出作戦 (図4)

女子短大の中庭にある池では毎年ヒキガエルが産卵し多くの幼生が見られる。しかし、変態後上陸した幼体は、四方を校舎で囲まれているため、成体が生育するための環境である近くの竹林や雑木林に到達できない。ヒキガエルが成体として成長するためには池周辺では難しく、近くの山に移動しなければならない。成熟した親でさえも周囲の雑木林から池に戻るのが困難である状況なので、小さな変態したばかりの幼体にとっては山に行くのは困難なことになる。非常勤当時から中庭で山に戻れない個体を救出してきた。4年前に子どもと自然環境というゼミを担当することになり、命を考えさせるのによい材料と考え、ゼミ生全員で救出作戦を執行している。中庭の幼体を素手で拾い集め森に放すという単純な作業ではあるがゼミ生以外の協力もあり、毎年数千頭を救出している。



図4 救出したヒキガエルの幼体を山に逃がす

#### (1)一④ 弥生祭 (図5)

毎年11月に、本学の大学祭である弥生祭が開催される。ゼミとしての参加も可能であり、物品販売や食事の提供なども可能であるが、私のゼミでは一貫してカエルのフィギアを使った展示物を作成している。直径1.8mの円形テーブルの上に展示する作品を作っているが、ゼミ生全員の協力がないと完成できないほどの大作である。今年は『カエルの東京2020開会式』を作成し、事務室前ロビーに展示した。非常に好評で、展示部門では一位をとることができた。その後、水辺の森公園で開催されたエコフェスタにも展示し、さらに、サステナプラザながさきという市の施設をお借りしたカエル展でも展示している。なお、特専教授として

ゼミを持つようになってからの作品名は、2016年のカエルの卒業式、2017年のカエルの国の動物園、2018年のカエルの結婚式であり、2019年はカエルの東京2020開会式となっている。



図5 カエルの東京2020開会式

今までの4つの項目は毎年実施していることだが、年によっては他の経験をさせることもある。例えば、池の生物の観察、中庭でのセミなどの昆虫採集、講師を呼んでの自然遊びの経験などである。時間の許す限り多くの自然との遊びを体験させたいと考えている。

## (2) 「何らかの動物を飼育（中心はカエル）することで動物とのかかわり方を学ぶこと」について

2016年度幼稚園で飼育されている動物調査を実施した結果、いろんな動物を飼育していることがわかった。それによると、学生が実習に行った71園中55園（77%）で何らかの動物を飼育しており、その中のベスト4がカメ、金魚、ウサギ、メダカの4種類となっている。このように多くの園で何らかの動物を飼育しているが、犬や猫以外の生き物を飼育した経験のある学生は少なく、現場に行っても遠くから見ていただけの先生になる可能性が高いと感じている。今後幼稚園や保育園などを職場として選ぶ学生にとって、何らかの動物を飼育する経験は将来の職場でも大事な経験になると考えられる。

4年間の飼育の結果は次のとおりである。

### 1年目：一人一種ずつの飼育

一人一種ずつの飼育を試みさせたが、週一回ゼミの時間だけの活動では無理なことが多く断念してしまった。唯一結果を出すことができたのは「カタツムリの餌による糞の色の違い」だけであった。

### 2年目：カイコの飼育

3齢幼虫を購入し飼育を試みた。ゼミ生全員に5頭ずつ配布し、餌やりと容器の清掃は各人が責任もってできるように研究室前の廊下に机を置き、毎日の世話を義務付けた。餌の桑の葉は私の方で準備し、いつでも餌やりが出来るように配慮した。飼育中に幼稚園実習が始まったので、それ以後は各家の方に持ち帰り飼育を続けた。ほぼすべてのゼミ生が繭になったカイコを研究室に持ち寄り実験は終了した。

### 3年目：オタマジャクシの飼育（図6）

学生の希望によりオタマジャクシの飼育を実施した。女子短大の中庭の池では毎年ニホンヒキガエルが産卵し5月初旬までは幼生が見られる。ゼミの時間等の都合で飼育開始が5月中旬となり、ヒキガエルは変態し上陸した後だったので、その頃に繁殖期となったシュレーゲルアオガエルを観察材料として選んだ。卵塊を採集し、研究室でふ化させ、一週間ほど放置した後にゼミ生全員に5頭ずつ配布した。研究内容としては、8名のゼミ生が餌を変えることで成長の差を見ることとした。飼育は、研究室前の廊下で行い、毎日、水替えや餌やりには研究室に来るようにした。幼稚園実習が飼育中に実施されたので、全員持ち帰り飼育を継続し、実習後に変態した幼体を研究室に持ち寄り、構内の森に逃がした。

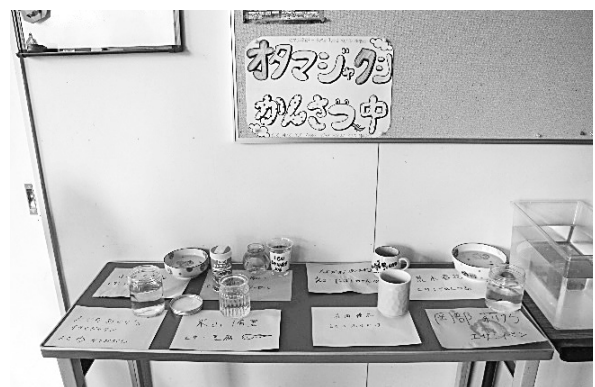


図6 廊下で飼育観察中

### 4年目：オタマジャクシの飼育（図7）

前年度の卒研発表会はカエルの飼育を中心に発表したため、学生のオタマジャクシの飼育に関する関心が高く、今年度も学生の希望により同様の飼育を試みた。前年度とは異なり、餌はハウレン

ソウだけとし、5頭全部を変態させ、幼稚園実習の際に園で披露することを目標とした。そのため、普段は構内の研究室前の廊下で飼育していたが、幼稚園実習で登校できない場合は自宅での飼育観察となった。12名全員が完全に変態させてカエルを持ち寄ることを目標としたが、生き物の飼育は簡単ではなく、失敗した者もいた。しかし、それぞれが就職後の保育園や幼稚園でのことを考えるととてもいい経験になったと思う。



図7 オタマジャクシの体調測定

4年間のゼミ活動において最も中心に設定したのが生き物の飼育経験であった。飼育する動物は何でもよかったが、動物が大好きという学生はほとんどいないので、無理やりという飼育になる。また、短大のため空き時間がほとんどなく週一回のゼミの時間しか利用できないという制限があった。その中で、一ヶ月程度の短期間の飼育で結果が出させるものとして、カイコとオタマジャクシの飼育を実施してきた。両方とも、成長し、やがて成体（繭をつくる、カエルになる）になるという劇的な変化がみられるので学生の食いつきもよくこの二つを選択させている。

### (3) 「カエルの研究を通して学んだことを、特別支援学校や幼稚園で発表すること」について

研究室では多くの生き物を飼育しているが、中心はカエルである。ニホンヒキガエル、ニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエル、アカハライモリ、ウーパールーパー、アフリカツメガエルを飼育しており、普段から学生にはカエルに親しくしてもらっている。さらに、研究としてオタマジャクシの飼育やヒキガエルの救出作戦などカエルに接することが多い。このような環境やカエルの飼

育の実践経験を生かして、カエルの授業の実施を行っている。

#### (3)ー1

ゼミの一環としてカエルの授業を附属幼稚園や特別支援学校で実施している。附属幼稚園は平成30年度だけであるが、特別支援学校は毎年実施している。なお、特別支援学校の実践例は、紀要第42号において私個人だけで実施したことを報告済みではある。しかし、現在では、ゼミ生を中心に実施していることから新たな報告としたい。

一年目：長崎特別支援学校（ゼミ生参加なし）

二年目：長崎特別支援学校

三年目：長崎特別支援学校小学部4年生、長崎特別支援学校7組、長崎女子短大附属幼稚園年中組

四年目：長崎特別支援学校小学部4年生

長崎特別支援学校のカエルの授業は、一年目だけは私一人で実施したが、二年目はゼミ生にも一部参加してもらい実施した。三年目からは、重度の障害を持つ支援学校での経験は学生にとっても計り知れないものがあると考え、ゼミ生全員参加という形に変更していった。その中で、教員である自分が中心となるより、多人数の若い学生中心の方が児童の反応がよいと思えたことから、四年目となる今年は内容も一新し、学生がつくった「カエルになりたい」という紙芝居（図8）を加えたり、楽器を持ち込んでの合唱をしたりするなど、ほぼ、学生だけの活動とした。



図8 紙芝居「カエルになりたい！」上映中

今年度のカエルの授業は次のように実施した。

場所：長崎特別支援学校

時期：令和元年7月10日(水)

時間：10：20～11：20（60分）

対象児童：小学部4年生5名

参加者：担当者4名、校長・教頭先生、保護者1名、その他数名の学校関係者

マスコミ：長崎ケーブルテレビの取材を受け、翌日のなんでんカフェという番組で放送された。

以下、今年のシナリオを紹介するが、その場の雰囲気や臨機応変に変更して実施した。

カエルの授業のシナリオ

### 導入 【5分】

あいさつ ゼミ生代表あいさつ。（ゼミ長）

- ・カエルについて話をする事を伝える（カエルって知っているかな？）。
- ・ゼミ生全員がかぶりものかフィギアをもち、前に並ぶ。
- ・ゼミ長は一步前を出て、ゆっくりと話をする。

### 第一章 紙芝居の読み聞かせ 【15分】

・・・「カエルになりたい」

紙芝居がよく見えるように正面に机を寄せ学生全員で児童を囲む。

- ・読む人はゆっくりと読む。  
8枚の紙芝居を上手にだし、大きさに大きな声で呼んでいく。
- ・オタマジャクシのシーンでは大きな3つのペープサートを目の前に出す。
- ・カエルさんになったシーンではカエルのぬいぐるみを着て児童の前に出る。  
※ 残りの学生は児童の後ろに座り、いっしょに聞いていく。その際、読み手の質問や疑問に合いの手や答えを発する。

### 第二章 手遊びと合唱 【15分】

(1) 手遊びをする（図9）

「一匹のカエル」

児童の前に行き、指に一匹ずつカエルをはめていく。歌は全員で歌い、歌いながら、興味のある児童には、人形をはめてあげるのもいいかな。

(2) 歌を歌う ……「カエルの合唱」

4回、同じ歌を歌う。

- 一回目：中型のカエルの打楽器
- 二回目：小型のカエルの打楽器

三回目：大型のカエルの打楽器

四回目：全部そろって音をだす

- ※カスタネットは後ろで、同じように音をだす。
- ※キーボードの伴奏を行う。



図9 カエルの手遊び実施中

### 第三章 本物に触れよう 【20分】（図10）

カエルだけでなくいろいろな動物と触れ合う。

- (1) いろいろな動物について説明する。5人同時に触れ合わせ、ローテーションとする。
- (2) 2人一組で実施する。

- ※「やさしくね」という言葉をかけながら触らせる。
- ※急に飛んだり、おしっこをしたり、動いたりするので、細心の注意を。



図10 カメと触れ合っているところ

支援学校に持参した動物たち

触れ合わせる動物……2人一組で行動し、片方が手を拭いてあげる。

ヒキ四郎 イシちゃん クサちゃん

カメール マダガスカルオオゴキブリ

水槽ごしに見せる動物

アカハライモリ、アマガエル、シュレーゲルアオガエル、カタツムリ

以上のシナリオの中で、第一章と二章はほぼ予

定通りに実施できたが、第三章の本物に触れようでは、支援学校の先生方の不安（びっくりするのではないか）から、まずは、私の方でヒキカエルを使って一人ずつ慣れさせることとした。不安がないことを確かめた後に、学生たちのそれぞれの分担の動物と触れ合ってもらった。

当日の感想を先生方や保護者から頂いているので紹介したい。

（令和元年度分）

・本校の子供たちは、上下肢等の障害から手足を自由に動かしたり、移動したりすることが困難で、結果的に生活経験の不足につながっているケースが多いと思われます。そのような状況にあって、今回のように実際に見たり触れたりするといった生きた経験は、直接子どもたちの感性に訴えるものがあり、子どもたち表情や発声からも十分に伝わってきました。カエルの感触、温かみなど普段の机上の学習では味わえない貴重な経験だと感じました。

・今回のように、絵本や紙芝居をする際には、大きめのものがよいかと思われます。子どもたちは視力や視覚認知的に「見え」に課題を持っているケースが多く、小さい挿絵などには注意が向きにくい傾向にあります。校内では、大型絵本を用いることが多いです。

・今回、歌や手遊びが多く取り入れられていましたが、子どもたちの大好きな活動の一つです。子どもたちも集中して聞き入っている様子が見られました。今後も、ぜひ取り入れてほしい活動です。

・学生さんが子どもたちにマンツーマンで対応していただいたことで、より集中が向き、密度の濃い授業になったと思います。また、事前の流れがあったかと思いますが、松尾先生が時折学生さんを集められ、内容を流動的に変更していかれたことで、より子どもたちの実態に即した授業になったと思います。私たちも学ぶべき点だと思います。

（平成30年度分）

・生き物の本物の迫力や感触などは、写真や言葉では何度伝えても伝わらないので、今回の特別授業は本当にありがたく感謝でいっぱいです。また、断片的な知識が今回の体験で理解につながる意味

（カエルの子供はおたまじゃくし）でも貴重な機会でした。そして、学生の方々読み聞かせや合唱、ぬいぐるみの準備など、何から何まで充実した時間となりました。

・日頃、虫や生き物などに触れる機会の少ない子供たちにとって大変貴重な体験のできる時間になりました。教師としても、子供たちの予想外の反応なども発見できる時間となっています。生き物に触れる体験だけでなく、絵本や歌、ぬいぐるみなど色々と工夫してくださいって、いつもありがたく感じています。

・本物に触れることの大切さを改めて感じました。写真や絵ではわからない重さや質感（冷たい、固い、ぬるっとしてい）も含めて、存分に感じる事ができたように感じます。この子には触らせることを中心にしよう！！と一人一人の子供の実態に臨機応変に対応していただきありがとうございます。

平成29年度の保護者の意見（保護者の感想はこの年だけ）

・先日は出張授業ありがとうございました。松尾先生が来てくださると聞いた時からとても楽しみにしていました。普段から色々な物に興味を持ち触るのですが、口に持っていくことが多いため、多少不安もありました。あんな大きなカエルやゴキちゃんを見たり触ったりはまず体験させてあげることではできないのでよい体験ができたと思います。生き物はやさしくやさしく触ることもこの授業を通じて少しずつ理解していってくれたらと思います。カエルの曲を聞いた時も好きとそうでないがはっきりしていたのでその点も体全体で表現できて良かったです。

・初めにカエルのぬいぐるみや帽子、音楽などを用意していただき、子供も自然と授業に入ってしまったように感じました。実際のカエルの声も写真を見ながら聞くことができ、耳や目で楽しむ事ができたと思います。後半に登場した生き物たち。日常では生き物事態に触れる機会がほとんどないので、子供がどのような反応を示すのか、親として大変興味がありました。強く握ったりしないかヒヤヒヤしていましたが、そっと触ることが

できていました。怖がる親をよそに生き物と触れ合う子供を見て反省しました。翌日、テレビで偶然ザリガニを見ました。それを見た瞬間、子供が「あっ、私これ見た」と言わんばかりの表情をしました。キラキラした目で見ていました。子どもの記憶にしっかりと刻み込まれたんだなあと改めて思いました。今回、大変貴重な機会を頂きありがとうございました。

実施した学生の意見（令和元年度分）（図11）



図11 全員そろってあいさつ

- ・楽しかった。思っていた以上に反応がありやりのある授業になった。
- ・ジャージで臨んだが、ピアスやネックレスははずした方がよいと思えた。
- ・紙芝居を読んでいるとき反応が見られ、読みながら楽しくなった。途中ででたオタマジャクシのペープサートは驚くほどの反応で工夫して臨むことの大切さを知った。
- ・紙芝居、歌、本物という順番がよかったと感じた。子供たちに恐怖心を抱かせずに本物に触れるところまで持って行けたことがよかった。
- ・重度の障害を持った子供たちの前で授業をすることの大変さと喜びを感じることができた。これは、十分な準備の下に実施した結果だと思う。
- ・卒研発表会で支援学校での授業の様子を聞いてこのゼミを希望した。実際に経験させてもらって先輩たちが話されていた多くの感動を味わうことができ今後の仕事に生かせると思う。

長崎特別支援学校でのカエルの授業を始めて4年になる。毎回の反省をもとに改良を加えていったが、今年の形が一応の完成形だと感じる事ができた。子供たちの反応は普通の子供たちに比べ

ると非常に小さく少ないものだが、我々障害児教育の素人から見ても反応していることが分かってきた。この授業を始めた当初は反応のなさに戸惑い焦っていたが、今思えば子供たちの反応を見る余裕がなかったからだと思う。4年前、当時の校長先生や事務長と偶然話し合う機会があり、支援学校側の「子供たちに本物を見せ触れさせたい」という願いと私自身の支援学校でのカエルの授業が可能かどうか実施してみたいという願いが合わさって実現したことである。今では、ゼミの学生を巻き込んで、ゼミの一番大事な活動になっている。支援学校の子供にとっても授業を行う学生側にとっても貴重な経験になりこれからの人生に役立つことになるかと信じている。

### (3)－2

実習先の幼稚園でカエルの話をしたり、飼育中のオタマジャクシや変態直後の幼体を見せ、可能なら設定保育の時間にカエルの授業を展開することを試みた。

#### (3)－2－1

オタマジャクシの飼育最終段階である変態時期が幼稚園実習にあたるため、各自が幼稚園側の了解を得て変態しつつあるオタマジャクシを見せることを提案した。その結果、12名中10名が何らかのカエルの授業が展開できた。

#### 幼稚園での結果

12人中10人の学生が、園の了解を得てオタマジャクシや変態した子ガエルを見せることができた。2人の学生は見せることができなかった。その理由としては次の通りであった。

- ・「園児は見たことがないのでびっくりするかもしれない。絵本で見せて欲しい。本物は見せないほうがいい」という園長先生の考えに従ったから。
- ・学生側の考えで、オタマジャクシのことを言う雰囲気ではなかったのであきらめた。

#### (3)－2－2

10人の学生が園の許可を得てオタマジャクシや幼体を見せることができた。見た園児や先生方の反応は様々であるが、「興味深々でとても喜んでいる」との意見が大半であった。園児・先生とも

反応がほとんどなかったという一園以外の状況は次のとおりである。

学生1. カエルの絵本を読み、折り紙でピョンピョンとぶかえるを作って遊んだ。カエルの手遊びを行なったが、その時は本物は使用せず、別の日に見せた。

学生2. カエルの成長過程（卵→おたまじゃくし→カエル）を自分で描いた絵を使って説明し、持参した変態中のオタマジャクシを見せた。

学生3. 折り紙を使って、ピョンピョンガエルを作成し、遊んだ後に、本物のオタマジャクシやカエルを見せた。

学生4. 梅雨の時期にどんな動物がいるかを聞き、イヌとカエルの成長の違いを説明した。その後、カエルの絵本を読み聞かせを行い、本物のカエルを見せた。最後に、カエルの唄を歌いながら自由に躍らせた。

学生5. 梅雨時にいる動物としてカエルがいることを話し、手作りのカエルの紙芝居（タイトル：カエルになりたい）を見せた。その後、本物のカエルを見せ、オタマジャクシや肢の生えるようすを観察させた。カエルの進化ゲーム（運動遊び）を行い、みんながよく分かった証として、カエル博士のメダルを全員にプレゼントした。

学生6. オタマジャクシを見せながら、何を食べるか。どうやって飼育するか。肢が生えてきたら陸上を作り、完全に変態したら、野外に逃がすことを説明した。

学生7. カエルの歌を歌った後、カエルのおもちゃ（ピョンピョンガエル）を作り、みんなで飛ばしながら遊んだ。最後に本物のオタマジャクシや変態直後のカエルを見せた。

学生8. 手遊びの後、カエルの絵本を読む。どのように成長するかを話した後、本物のオタマジャクシを見せた。その後、カエルの絵を書いたり、ピョンピョンガエルを作成しあそんだ。カエルかくれんぼも実施した。

学生9・10. 研究授業がなかったので授業では見せることができなかつたので別の日に見せ

た。

今回の幼稚園実習では他のゼミではできないことを多少とも実施できたと思う。実施内容は十分とまではいかないが、ゼミ活動の成果の一部は発揮できたと感じているので、今後さらに発展させていきたい。

(3)-2-3

カエルの授業を展開させた10人の中で、最もユニークで充実した内容について紹介したい。

学生5のカエルの授業

日時：令和元年6月10日(月)

場所：かめりあこども園

対象クラス：5歳児クラス（27名）

内容：設定保育「カエル博士になろう！」

①導入のお話

②カエルの紙芝居読み聞かせ『かえるになりたい!』（全9枚）

③本物のオタマジャクシと触れ合う

④カエルの進化ゲーム（運動遊び）

⑤カエル博士のメダルをプレゼント

導入として、梅雨時という季節からカエルという言葉を引き出し、カエルはオタマジャクシからカエルに成長していくことを話したようだ。その後、カエルの成長過程が分かるように紙芝居（カエルになりたい：自作の紙芝居）の読み聞かせを行い、本物との触れ合いも実施したとのことである。

紙芝居『カエルになりたい!』（図12、13）

作者：森小弦（松尾ゼミ学生）

カエルの授業を実施しての感想

実習期間の季節が梅雨だったのもあり、子ども

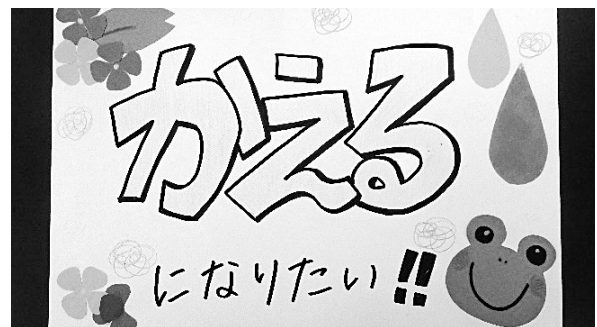


図12 カエルになりたいの表紙

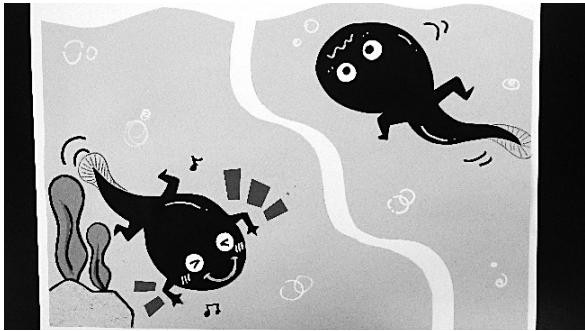


図13 前足から後ろ足が生えるところ

達もカエルにとっても興味を持ってくれた。準備した紙芝居を出すと、子ども達は何が始まるんだろうとワクワクしたような表情だった。読み聞かせをしている間も、「どうなるか分かる？」など子ども達に声かけをすると、元気よく言葉を返ってきた。その後、実際に本物のオタマジャクシを子ども達に見せると、今までにないくらいの勢いでオタマジャクシに向かっていく姿があった。子ども同士の手がぶつかり合うくらい近づいて見ていて、オタマジャクシをもっと近くで見たい、触りたいと、とても興味を持ってくれた。その時のオタマジャクシは、後ろ足だけ生えているもの、足が全部生えているもの、まだ足が生えていないものなど様々な成長過程のオタマジャクシがいたため、班ごとに交代しながら観察させた。すると、子ども達は「さっきのと違う!」「足が生えてるやつだ!」などと気づきを子ども同士で話している様子もあった。オタマジャクシと触れ合う時間を設けると、少しだけ怖がりながらも勇気をだして触ってみたり、飛び跳ねたオタマジャクシにびっくりして声を上げて笑いあったりと、実際に生きている生き物と触れ合えるのがとても嬉しく楽しそうだった。

この設定保育は、カエルについてより子ども達に知ってもらいたく設定した。一番の目玉である本物のオタマジャクシを見せる前に、カエルについて興味・関心をもってもらおうと、導入に力を入れた。視覚的教材を使うことで子どもにも楽しんでもらいながら活動ができたこと、子ども達の反応を見て感じた。活動のなかで、保育者の些細な声かけや話し方で、子どもの反応も大きく変わってくるということが今回の授業でより感じられた。

そして、実際に生きている生き物を授業に取り入れることで、普段できない経験を子ども達に与えることができるとともに、そこで子どもが感じた様々なことを誰かと共有したり、言葉にしてみたりすることができる。『生き物と触れ合う』ことは、子どもの豊かな感性に大きく繋がるものであると分かった。

#### 4. 最後に

平成23年3月に公立高校教諭を退職し、その年の4月から非常勤講師として、環境やヒトと生物などを講義してきた。しかし、講義だけの学生との付き合いのであったため、短大に勤める生きがいというものほとんどなかった。平成28年4月に特別専任教授という肩書を頂き、研究室とゼミ生を抱えることになった。このことは、非常に嬉しくやりがいも芽生えてきたが、同時に全く経験のないゼミ活動は暗中模索の日々であった。それというのも、幼稚園や保育園で保育者になる学生は自然環境にはほとんど興味がなく、特に、私の専門とする動物には関心すら示さない状態であったからである。これらのゼミ生を何とか長崎女子短大の松尾ゼミに入ってもらったと思わせるための悪戦苦闘であったように思う。4年目が終わろうとする現在、何とか、子どもと自然環境ゼミとしてやるのが固まってきたように感じる。あとは、マンネリ化しないようにさらに進化していく努力を継続していきたい。

#### 文献

- 松尾公則『長崎県の両生・爬虫類』長崎新聞社、2005  
 文部科学省『幼稚園教育要領解説 平成20年7月』2008  
 長崎女子短期大学幼児教育学科『卒業報告集(第37集)』2016  
 松尾公則 2017 幼稚園での野外観察の実践例 長崎女子短大紀要41: 77-82  
 無藤 隆『事例で学ぶ保育内容 環境領域』2017  
 田宮 縁『体験する 調べる 考える 領域「環境」』萌文書林、2017  
 松尾公則 2018 特別支援学校でのカエルの授業の実践例 長崎女子短大紀要42: 52-58  
 森小弦他松尾ゼミ11名: 2020 子どもと生き物について考える 長崎女子短大幼児教育報告集40: 1-24